岐阜林業

大正四年九月二十五日　第七拾一號　（毎月廿五日発行）　（明治四十二年七月十日第三種郵便物認可）

目次

▲研究
製炭法の研究
佛國森林の破壞
最新式害虫病菌驅除法

▲文苑
舞鶴軍港見學記
内田益治君を憶ふ
養老瀧記行

▲通信
四國會友會便り

▲雜報
學校記事
其他

研究

製炭法の研究

北村正夫

其十　北村式八德製炭法（つゞき）

二、炭竈の構造及附屬設備

炭竈等の構造は圖を示して説明しなければ充分了解する樣に述べることは出來ぬが印刷の都合で出來兼ねるから遺憾ながら極概略を述べることゝする

炭竈……は在來の黑炭竈でも白炭竈でも又大竈でも小竈でも差支へはないから從來製炭を營むで居るものは其炭竈を改築する必要はないが。若し新たに築造するならば一定の寸方に準據して竈奥を廣くし本煙突の外に竈奥の左右へ稍小形の補助煙突を設ける（寸方は省略す）此の補助煙突は點火のときと炭化の末期とに使用し其點火を容易ならしめ炭化の完了を早め炭材下部に未炭化部を殘さず且つ一樣に煉炭をなさしむるためである。

木醋液採集裝置　は從來種々の方式が行はれて居るが何れも一得一失を免れない。一般に冷却用土管を大師孔又は煙突へ直接に取り着ける樣になって居るため炭化の進度に伴ふて發煙の加減をすると云ふことが出來ず且つ順流裝置では屢々發煙を妨げ又逆流裝置では發煙を促進せられ何れも炭化に惡影響を及ぼすことがある。依て此等の缺點を避けるために大師孔の上へ漏斗狀の口を付けた長さ三尺位の土管を（鐵又は亞鉛板にて造れば取扱便なり）垂直に据へ付け大師孔と土管の口の間を二寸位離して置く（之れは煙を導く時に設くるもので其他の場合は取り離すことの出來る樣にし又點火中には大師孔の煙突に代用することが出來る）此の土管の上に曲り土管を付け夫れより約二三間位の長さに順流的に冷却土管を裝置し其所に桶を取り付ける。其桶から前の冷却土管は逆流裝置にして其長さは何程にしても差支へはない。尤も木醋液を受け溜める桶は一個でも差支へはないが其冷却の程度即ち冷却土管の本の方と先きの方とによつて液の性質が一樣でないから之れを區別するために桶を二三個取付ける樣にするが宜しい。

此方法を用ゆるなら風等のために發煙を妨げられることは殆んどなく又大師孔と冷却土管との間に隙きがあるから自由にせめ木を挿入して其加減をすることが出來る。

醋酸石灰の製造裝置　醋酸石灰製造は多數の炭竈から採集した木醋液を一定の工場へ集めて製造すれば設備も完全に出來るが之れは大林區署とか御料局其他の大事業家が地勢の緩な都合のよい場所で行ふべき方法

であつて地形の惡い所や小事業家は到底斯樣なことは出來ない。つまり一般には一竈若しくは二竈位を合併製造する位のものである。故に各竈の附近に簡單な小屋を設け其所へ窯を築いて製造するのである。りこで此の八德製炭法では此の窯を炭竈の口に設けて醋酸石灰の製造を爲し其煙突から空しく放散する熱氣を炭竈内に導き入れ夫れで炭材に點火し之れを炭化するのである。即ち炭竈の口から二三寸位前の土地を一尺五寸内外の深さに堀て醋酸石灰を煮詰める鍋の大きさ《此の大さは其炭竈から採集し得る木醋液の量に應じて加減すべし》に適合する樣に窯を築くのである。尙此の煮詰鍋は一つにする方が製炭の方から云へば都合がよいが燃料を節約するために二つつづきに設けても差支へはない。

三、製炭及醋酸石灰製造法

炭材の詰込み及準備 炭材の詰込み方法は普通の製炭法と同樣でよいが炭材が小さいときは上げ木を用ひないで在來の白炭製炭法の樣にして宜しい。上げ木は良い炭とならず挿入れをなすにも非常に面倒であつて且つ時としては竈の天井を破損することがあるから上げ木を用ひない方が便利である然し上げ木を用ひないと點火を爲すに長時間を要するのであるから時間と燃料の方では多少の損となるを免れない。斯くして大體炭材を詰め終つたならば口元に乾いた燃へ易い木を少し入れて竈口を全部粘土で塗り塞ぎ其内方の竈底へ其前に設けてある醋酸石灰製炭の窯の煙出し口を開き其處より火氣を炭竈の内へ通する樣にする。《此孔を火氣孔と云ふ》

點火及炭化中の加減 以上の準備が出來たならば窯に煮詰鍋を載せ火氣の漏れない樣に鍋の周圍に粘土を塗り塞ぎ石灰中和をした木醋液を入れて火を焚き付ける。さすれば其火氣は炭竈の内へ入り先づ口元にあり枯木に点火し夫れより漸次炭材に點火する初めの内は速く炭材に點火せしむるために火氣孔を稍々大きくし炭竈の本煙道には煙突を立て補助煙道も開いて煙突を設け又能く乾いた燃材を用ひて成べく窯の奥で焚く樣にするが宜しい。斯くて大體點火したならば漸次火氣孔を狹め補助煙道も塞き尙炭化の進むにつれて大師及火氣孔を加減し堅質の良炭の出來る樣に徐々に炭化せしむるが宜しい。此の火氣孔が大きく大師の加減をしないときは炭化日數は非常に短縮するが余り急に炭化するために炭質を損じ又木醋液の品質も惡くなるから其加減を誤らない樣にすることが肝要である。

木醋液の採集 此八德製炭法に於ては在來の方法と異つて最初から煙を冷却管に導いても製炭上には何等の影響を蒙むることはないが初の内は大部分水分であるから之れを採集しても利益にはならない。故に大師から發する煙が褐色を帶び强く鼻を刺擊する樣になれば煙突を取り除き煙を導く裝置を取りつけて冷却管に導く。斯くして溜桶に集まつた木醋液は他の大桶へ移しタールを沈澱さして醋酸石灰製造に供するのである故に最初の一竈の製造すべき木醋液がないから普通の方法で製炭を行ひ其採集した液を次竈の製炭中に製造する樣にするが得策である。

製炭中の焚火及煉炭法 炭化中は絶へず焚火をするが宜しいが夜中はつききりで焚火をすることは出來ないから大きな薪材を澤山に挿し入れ翌朝迄火氣の絶へない樣に焚口に狹くして空氣の入るのを制限し尙火氣孔も狹めて置く。斯くすれば翌朝迄も充分に火氣を保つて居るから翌早朝に焚口を開き殘て居る火を搔き起し枯枝を入れ再び焚火をつづける。《火氣孔も元の通りにする》かくて愈々青煙となつたならば大體炭化が終つたのであるから焚火を止めて補助煙道を開き《本煙道は少し狹めるがよい》竈口の下方へ三四個の小さい孔を開いて煉炭を行つた後竈内消火法ならば總ての孔を密閉して消火を爲し竈外消火法ならば更に充分に煙炭を爲した上徐々に炭を搔き出し素灰を掛けて消火するのである

其十一、製炭事業者の改良

校友諸君 世の中には隨分譯の判らぬ事があるが製炭者を一種劣等なる人間であるか

の樣に卑下する世間の奴等の心事程了解に苦しむことはないと思ふ。實に製炭者は粗衣粗食を忍び不便な山中の堀立小屋に起臥して炭粉や灰で眞黑になるのも忌はず神聖なる勞働に從事して吾人が一日も缺くべからざる木炭を製造して下さるではないか吾人は此の尊敬すべき製炭者に向て感謝すべきが當然である。然るに世間の奴等は一口にあいつは炭燒だと云ふ。其炭燒と云ふ言葉の裏面には忍び難き輕侮の意味が含まれて居る。現に先達て僕の所へ手紙を遣して……君も相當の敎育を受けて居る者ではないか何も物好きに炭燒の稽古抔をせずとも食つて行かれ相なものだ炭燒の研究抔もいゝ加減にやめたらどうだ……と賴みもせんに忠告をして來た奴がある。僕は此の樣な沒常識な友人を持つて居ることを此上もなくなさけないことに思ふ。

一體製炭者が汚衣を着け眞黑な顏をして堀立小屋に居るので賤しい云ふなら美衣を着け眞白な顏をして高樓に住んで居る賤業婦抔は此上もない尊いものと云はねばならぬ如何に馬鹿な世間の奴等でも此の推論は是認しないだろう。此頃の新聞にもあつたが南洋の美人はテイクと云ふ草の根から採た黃江色の染料を椰子の油で溶いたお黃ろいを顏から上半身へこて〳〵と塗つて目ばかりばちくりさせて得意がつて居ると云ふでないか。炭燒が炭粉や灰のお黑ろいを顏や手に付けて眞黑になつて居るのは寧ろ立派な化粧と云ふてもよかろう。僕は白粉よりも炭粉香水よりも糞尿の方に一種の尊敬すべき色と香がある樣に思ふ。

斯樣に世間の奴等も甚だ沒常識であるが從來の製炭者吾炭燒夫も甚だ自重心がなく余りに超然主義である。斯る世間からの冷遇輕侮を受けても敢て意にも介せず隨て向上の精神なく自ら進んで事業の改良發展を圖らんとするものは甚だ少く唯林間の堀立小屋に起臥して理想もなく趣味もなく單に食ひ單に生存すると云ふが如きものが隨分多い肝心の製炭者が此樣な風では百の改良法も何の効があろう各地に於て改良製炭法を奬勵しても其効蹟の擧らないは無理もないことである。今や大正の聖代となり今日の農民は昔日の土百性ではなく、今の商業者は昔の素町人とは全く變つて居る然るに獨り我製炭者は依然として昔のまゝの炭燒の面目を改めず縣郡に於ける熱心なる指導奬勵も其効を奏せず組合を設けて其定礎が實行せられず講習會を催して進んで出席するものが少く又改良法を收得しても之れを實行するものは少いとは實に慨歎に耐へない次第である。故に製炭事業の改良を爲さんとするには《其九》に示した六厘に對する改良法を研究すると共に製炭者の自重心と向上心とを養成し彼等をして昔日の炭燒夫より脫して堂々たる大正の製炭者若しくは炭製造者たるの精神を持たしめ彼等をして自ら進んで研究し改良を實行せんとする覺悟を起さしめたならば改良法は容易に普及し充分に其効績を擧げることが出來ようと考へる

昨年の十二月號以來永らくの間つまらぬ事を書き連らねたが本號にて製炭研究の來歷と其結論だけは大體述べ盡したから一先づ之れを以て筆を遏くことゝする尙終りに臨み貴重なる紙面を割愛せられたる雜誌部諸君の厚意を謝し又態々手紙を以て深厚なる同情を寄せられ或は研究上有益なる材料を惠まれたる各位の御厚情に對し感謝の意を表します

警程一千日 (其一七)

曾山子

歐洲大戰が及ぼす佛國森林の破壞

明治三十九年九月下旬余は米國の一青年『ダックワース』君と武州三峰山嶺の客舍に對談す時に彼の父君が南北戰爭に一隊の指揮官として深林中に苦鬪し遂に勝利を得たるが其後彼カレッジを出でて該林の伐採事業を擔任せるに其材質の毀傷甚しく使用に堪ゆるもの少かりし……を聞尙耳底に存す然るに今アメリカンフォレストリー誌を讀むに方り本題の記載あり感又深からざるを得ず即ち抄譯をよせて參考に資せんとす

過去一ヶ年に及ぶ有史以來の大戰は全世界を震駭せしめ加之今后の模樣及其損害は測り知る能はざるなり有名なる佛國美林が此の大戰に依りて受けたる巨額の損害は戰爭終了後ならでは知る能はざる處なれば今は現在に於ける破壞の狀況を想察するに止めんか

一、陸軍當局が戰略上の必要及び砲の効力を一層有効ならしむる爲めにする林木の伐り倒し

二、塹濠及び庇護舍並に道路用としての森林伐採

三、糧食調理用及び保煖用燃料としての伐採

四、敵軍が高價なる分捕物として伐採搬出し去るもの

五、戰略上又は突發的なる發砲又は山火の爲めの林相破壞

等が森林破壞作用中有力なるものなるべく此等主因の增大に連れ益々損害額の增加すべきなり

彼の頑健なる獨軍が白耳義を侵略して佛國に入るや佛國巴里の驚駭は實に名狀の外にありき、而してガリニー將軍指揮の下に直に外方防禦線編成せられ又同將軍の指揮下に豫備的の廣大なる連鎖と企てらるや其爲めに都市の周圍なる廣大なる美林は策戰上除掃するの必要を生ずるに至る

モントモレンシーの森林は策戰上砲の動作を可能ならしむるの必要上又敵軍に於て砲台又は埋伏所を設くるの便を得させざらんが爲めに捨て賣りに附せられ全く深綠の舊態を失ふに至れるが如きあり

アラスに近きボービグニー森林及びバーソンヴアールの森林内に於ては通路泥濘にして且つ壕多きを以て新に各方面に無數の大道路を通じ木材を以て敷き詰の大砲其他の戰器を搬運するに至れりと、而して又庇護舍及び燃料として伐り倒さるゝもの少からざるは勿論なるが戰略上巨砲を隱匿する爲めに大小無數の枝は無慘々々と代り採られ此の目的に副ふべく既に林相の損傷せられしを見て從軍中の一林木商は此の林相の恢復には少くも三十ヶ年を要すと云へり

次に砲の爲めの損傷を擧げんか

ルニーウイールの背后なるヴイトリモントの森林は殘り無き迄に減削せられ又ミュークスの林中に巾百五十フイートより三百フイートの道路が約一千フイート毎に切り通され以て巨砲の威力を逞しくする爲めに供せらるゝに至れり

有名なるナンシイの前なるアナンスの高原中の林木は戰の爲めに伐採し盡され、亦ドムバッスルとアラニコートの間なるクリーヴイーの森林は一九一四年八月廿二日及び廿三日の燒燼に委せられたり、而して彈丸による林木の損傷は戰鬪毎に其量を增加するは勿論なるがラッテーの林木中に二つの破裂彈が一樹の同高部に射入せしに一丸は右へ一丸は左へ貫通せるが該樹は局部より挫折せる如き奇觀を示せり

茲に一つの奇談として傳へらるゝものはアルゴン大森林中の巨多の美林が獨軍により伐採せられ有價林として彼の本國に搬出せられたるに計らざりき此等の幹材は損傷多くして少からざる手數を費さざれば使用し能はざるものなりと、最后にアメリカの森林愛護者として又高遠なる眼識を有する偉人バーナートパリシイ氏の金言を引用して此節を結ばんに曰く『私は木造庇護舍の最つまらなきを見たる時私は人間の無智なるに驚けり夫は今日僅少なる時間に處すべき策として先人の高價を拂ひて守護せられたる美林を破壞し去つて顧るなく又後世に如何なる影響を及ぼすやを考ふる智識なき彼等(夫れ等に對しては已れは亡狀を咎めざるべきも)の寧ろ其稚氣を愛せざるを得ず、然れども多くの林木が總て用途あるに及びて絕滅に歸し而して森林地方は總ての技工、工匠等を見棄つるに至るべく彼木材工匠等は茲に失職してネバッハドニーザーの爲せし如く牛の眞根をして草を食はざるべからざるに至る嗚呼又彼等の將來不窮の祖國を呪詛するものなりと呼ばれ得るにあらずや』

本稿は長文中の抄譯にかゝり且つ佛國語は英獨語的に讀み尙軍隊用語を辨せざる爲め文中意味の疎隔なきを保し難きも記して以つて高正を待つ (九月八日上田町客舍にて)

最新式害虫病菌驅除豫防法

(本篇は種倉隨造君の筆記寄贈に係る)

根切蟲

イ、二硫化炭素

床地三尺四方に深さ四五寸徑五分の穴六個を穿ち各穴に本劑八十瓦を分配注入すべし(即一穴に付約十三瓦穴の割合とす小なる漏斗を用ふるを便とす)注入の際には最も注意を拂ひ藥劑の穴より他に漏下することを避け且つ注入后直に嚴重に土を以て密閉し藥劑の蒸發飛散することなからしむべし本劑は害蟲驅除に有効なるのみならず苗木に對しても有効の作用を與ふ

一封度(四五〇瓦)凡二十五錢

ロ、硫黃

前法よりも一層良好とす播種前に施し本劑を粉末狀になし土壤に散布混淆すべし苗木にありては苗木の間に多くの穴を穿ち此内に施すべし施用后は直ちに口を嚴重に密閉し置くを要す

ハ、苗圃の床地と床地との間に藥、草其他雜物を敷き置く時は其内に害蟲は集りて產卵するを以て時々(特に秋季)之を燒去し更に新なるものを作り置くべし

一般苗圃甲虫類蟻類地蚤類

本害虫類は凡て青酸加里を施用して効あり本劑を充分碎きて粉末とし水を盛りたる器に投入すべし其割合は水千に對し本劑一の如くす(即ち水千c.cに青酸加里一瓦を加ふ)投入后迅速に攪拌し直ちに如露を以て灌注すべし此の割合の溶液にては苗木を害することなし

但し二%なるときは發芽床に於ては害を及ぼすも大苗は被害なし

杉赤枯病菌類

札幌合劑を施用すべし本劑は二斗式ボルドー合劑に亞砒酸の溶液三勺を加へ(即ち二斗三勺)となる充分に攪拌すべし施用の際には噴霧器を以て撒布すべし亞砒酸液一封度を製し置くときは必要に隱じ壺に混合使用し得るの便あり本劑は病苗のみならず地蚤類一部害虫に對しても有効なり

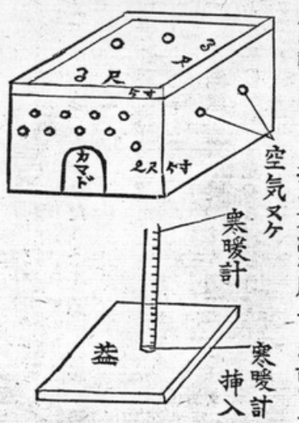
松立枯病菌類

イ、蒸燒法

鐵板を以て右器を裝置すべし苗圃の地表深さ五寸程を丁寧に採取し少許宛本器に容し水にて濕し蓋をなし常に攝氏八十度を保たしむべし斯くして約四十分間蒸燒し充分消毒の終りしを俟て取出すべし本法は立枯病菌のみならず凡ての病菌に對し有効なり

一坪の土壤を燒くには約二時間を要す

本法は面積一町歩以下の苗圃にありては有利なるも大苗圃に於ては多額の經費を要し用ひ難きにより次の方法を用ふるを可とす



ロをホルマリン

先づ播種前に土壤を攪拌し塵、木片根株等凡て障害物を除去し次に本劑の三%溶液を製し噴霧器又は如露を用ひ土壤の潤る程度に撒布すべし而して直に蕈類を以て其の上を蓋ひ一週間其の儘になし置き然る后苗圃の目的に使用すべし

附

光明丹使用法

先づ杉種子を水にて洗ひ充分水を切り(此事頗る重用なり)而して光明丹を付すべし發芽は多少后るべし

文苑

舞鶴軍港見學の記

宮川丑作

今夏偶々、縣下中等諸學校理科擔任教師と

共に、舞鶴軍港見學の命を受け、七月二十二日出發、同港に滯在五日。其間見聞せる處多く裨益尠なからず。大要を錄して同港の概略を紹介せんとす

七月廿二日　木曜　晴

朝五時五十分木曾福島發の汽車に乘り一行に加はる、總て拾八名。拾時五十八分名古屋着乘換、岐阜、大垣、關が原等を過ぎ、米原邊より湖畔の風景を賞しつゝ彦根、大津等を經、午後四時廿四分京都着、電車にて三條小橋に至り龜屋旅館宿、見學に關し諸般の打合をなす

七月廿三日　金曜　晴

朝七時廿分發の汽車に乘り綾部にて乘換ひ十一時十六分新舞鶴驛着

停車場にて案内の人々に迎へられ、見學の次第書を請取り、三條通、大門通を經て軍港東構門を入り、兵器庫埠頭より港務部汽艇に便乘、港務部棧橋に上陸、宿所に充てられたる水交支社に至りて晝食

水交支社は、海軍高等武官相互の友誼を敦うし、又海軍に關する學術を究研する集會所にして、圖書の展覽、日用品及飲食物の供給、宿泊、入浴、遊戯等諸般の設備行届きたる大廣なる建物にして、本社は東京に在り。一行の爲に其處を宿所に充てられたるは、誠に望外の仕合なりき

午後一時少し過ぎ直に宿所を出で、港務部棧橋より香取機動艇に便乘し、軍艦香取に乘る。艦の構造、機械の要部、兵員の日課等を實地見學し、時に副長山口中佐の講話を聽き、夕食の上八時少し過ぎ艦を辭し、徒歩して歸宿

香取は、英國ビッカース會社製造、明治三十九年竣工せる排水量壹万六千噸弱の戰鬪艦にして、長さ七十六間餘幅拾三間半、乘員艦長以下九百十五名（目下四百有余名）。艦隊司令長官の旗艦となりしこと數回、大正二年十一月恒例觀艦式には　今上天皇陛下の御召艦となりし名譽ある艦なるも、目下確定修繕の爲め在港せる豫備艦なり

艦内清潔に整頓し衛生も亦行届き、紀律嚴正なるも上下相和し、一艦恰も一家の如く和氣藹々たり。而て訓練の能く行届ける、兵員が諸種の作業中、能く沈默を守り一語を發するものなきに見ても、其一班を知らるべし

副長山口中佐は、熱心親切にして、説明案内懇篤を極め一行の等しく感謝せる所なりき。同中佐講話の題目は、海軍の組織、海軍將卒の任用進級及養成、香取の要目、艦内生活等なり

七月廿四日　土曜　晴

午前八時頃宿所を出で鎮守府訪問、長官及幕僚に面謁、敬意を表す。夫より港務部棧橋より定期船に便乘、兵器庫埠頭に上陸、需品庫を觀る

需品庫は、海軍工廠の一部にして、艦營需品—艦船部隊に供給する物品の調辨、供給に關する事務を掌理する所なり。該需品を消耗品、備品、貸與品等に別ち、各倉庫に陳列處理しあり、特に目に着きたるは、貸與品中天皇旗皇后旗其他諸種の旗旒なりき

次に衣糧科を觀る、

衣糧科は經理部の一科にして、被服物品、糧食品の調辨、配備、出納、保管、供給、準備、賣却及運搬に關する人夫舟車の傭役に關する事を掌る所にして、糧食品受渡所、被服檢査所、被服梱造場、被服裁斷所、被服物品手入所、被服材料庫、被服準備庫、被服新品庫、被服還納庫、火酒庫、鑵詰庫、乾麵麭庫、麵麭製造所、機關室及工業場、冷藏庫、洗濯場、乾燥室等に別れたり、一々順覽せり。夫より歸宿、午後は工廠並に驅逐艦梅を觀る。

工廠は造兵、造船、造機の三部に別れ、其處に作業する職工總て凡四千人、各部を一巡したるも始んど驅足同樣なりしかば、機械の構造、作業の實地等詳細に知る事能はざりしは遺憾なり、唯だ船渠、起重機（クレーン）等は流石に物珍しく觀たり。休憩中諏訪定船中監の工廠一般に關する講話あり、造船に木材は鋼に亞で多量に使用せらるゝものなるが、近時マホガニー、チーク等は使用せず、内國産の者を奬勵する趨勢となれり、山林學校の方も見ゆる樣なれば、特に一言す云々の一節を添へられたり

夜七時より水交支社大食堂に於て司令長官

の招宴に預る。主人側より參謀長、病院長海兵團長、鎮守府副官、造船中監、防備隊司令、香取副長、同砲術長、人事部長、工廠檢査官、同副官等十四名出席せられ、一行と席を交互に占め、懇談時の移るを知らざりし。其間絶えず軍樂隊の奏樂あり。我等は此席に於て海軍に關する諸種の智識を與へられたり

七月二十五日　日曜　晴

午前四時宿所を立ち徒歩して香取に行き乘る前日の殘り午前中の日課作業を觀んが爲なり。先づ起床時の作業を觀る、五時起床喇叭の鳴り渡るや、兵員一齊に釣床を離れ續て傳はる諸種の合圖に、或は釣床を始末し或は上甲板を掃除する等、一絲亂れず、諸種の作業を機敏に誠實に爲す樣見るから心地よし。六時半朝食、我等も中甲板にて兵食を共にす、七分三分の麥飯に味噌汁ーキャベツ、油揚、豆腐の實及澤庵漬、我等粗食に慣れたるものには、結構に味はれたり、七時中下甲板を掃除整頓し亞て武器其他機械器具の手入を爲す。八時軍艦旗を揭揚す、其際艦長は後甲板に於て、當直將校は艦橋に在りて敬禮し、其他總員姿勢を正し、上甲板以上に在る者は總て敬禮を行ふ、斯て港内に轟く喇叭と共に、中空に飜へさるゝ樣いと壯嚴なり

毎日沒時亦同樣にして卸さるゝ也。夫より艦内點檢の一部を觀、九時頃辭す、香取一日の生活は實に思出多き事どもなりき

懷かしき同艦に別れを惜み、同機動艇に移りて新川棧橋に上陸、下士卒集會所に至り長野縣出身の下士卒を集め慰問茶話會を開く、出席者約百七十名、種々の用務差支等あり出席せるは全員の五分の二位なりしと。同集會所は下士卒一般の休養及便益を圖るにあり、亦諸種の設備完全せり

終て兵器庫埠頭より定期船にて歸宿。午後は水交支社内に於ける講話を聽く

水雷に就て、綾部防備隊司令。砲煩に就て鹿江香取砲術長。共に有益なる講話にして各々約壹時間半に亘れり。講話を錄する事は略しつ

七月廿六日　月曜　晴

午前八時港務部棧橋發の汽艇に便乘、蛇島魚雷發射場に到り、第十一艇隊（二等水雷艇第七二、第七三、第七四、第七五號）魚雷檢定發射を觀る、總て五發。標的は發射艇より數百米突隔りたる所に裝置しあり、そを側面にし進行し來れる艇に赤旗の信號樹てらるゝや、魚雷は爆然海中に射出せられ、水深數米突の所を潛行する者なるを、波を湧き立て驀然進行する樣、壯觀筆舌の能く盡す處に非ず。昨其講話を聽き今又其實地を觀る、殊に檢定の發射は年壹回の事業なる由なれば、當局者が我等一行の見學に、如何に多くの便益を與へられたるかを察するに足らん

檢定未だ終らざりしも午後の日課もあれば名殘を惜みて歸路に就きけり

午後一時水交支社大食堂前に於て、長官以下幕僚、幹部と共に記念の撮影を爲し、海兵團に趣く

海兵團は新兵及普通科信號術、木工練習生の教育、軍港の警衛及陸上の防火等を掌る所なり。其處に諏訪出身の青木大尉あり、熱心に説明案内の勞をとらる。先づ手旗信號の教授を觀る、教官は小縣出身の中澤兵曹、過日の慰問會に出席せざりしを遺憾とすとて、新兵をツッチノケに、我等一行に挨拶を陳ぶるなど長野縣式を發揮せらる、氏は多年の苦心に依り海軍の歌を作りし由にて、やがて文部の檢定を受け、海軍思想普及の爲め、全國小學校に配布し度しなど氣焰を揚げられたり。夫れより船具の教授石炭焚方の練習、砲臺、炊事場等を觀て海軍病院に至る

其處にも上高井出身の丸田軍醫あり、懇切に案内の勞を執らる。病院の事とて一入清潔に、諸種の設備整ひたり。エッキス線の實驗尤も興味ありし

夜七時より、案内主任の大井大主計、鹿野大尉及兵曹貳名（内二名長野縣出身）を招待し、晩餐を共にす。折柄香取副長、鎮守府副官及加藤海兵團教育主任も來訪せられ、席を共にして新兵教育及海軍上の事に就き

意見を交換せり。

七月廿七日　火曜　晴

本日は司令長官の好意に依り、一行の爲め特に用意せられたる第一舞鶴丸（二百五十噸）に乘り、天の橋立に遊ぶ

朝七時四十五分港務部棧橋より離陸。懷かしき香取を左に見て冲合に進む、鳥島、蛇嶋を右に戸島を左にし、金ケ崎、博奕崎の間を縫うて與謝の海に出づ、藍水澄瑩、瑠璃底に徹す。加之天朗かにして風穏かに、細波淪漣たる間、軍艦旗を飜へして進み行く樣、壯觀極まり無かりし。やがて船首を左に轉じ、黒崎より宮津灣にひ、向ひ九時廿分江尻に着し上陸。此間十八浬、約壹時間半夫れより或相山に登る。

途上傘松の茶亭に涼を納れ、天橋を下瞰すれば、蒼龍の波に伏するが如く、諸勝碁布して扇履の間に在り、眞に造化の浮橋に似たり。登りて或合寺に詣で、賴光の物語など聞きて降り。北より橋を渡る。橋は長さ拾數町、幅狹きは數歩廣きは貳十余歩。白沙皎麗、万松鬱茂、騰るが如く蟠るが如く又躍るが如し。右は碧を湛へて小湖を爲し左は與謝の海に續きて水光天と一なり。橋の盡さんとする所なる小亭にて晝食、海水に一浴して俗塵を洗ふ。夫より小船にて切戸を渉り智恩寺に詣で、文殊にて乘船歸路に就く、時に午後二時廿分頃。元來し路をたどりて四時五分歸港、此日は實に香取の一日、魚雷の實見と共に見學中の三大樂事たりし也

歸宿直に司令長官、同副官、參謀長、人事部長の官宅に至り、謝禮旁々暇乞をなす

七月廿八日　水曜　晴

朝四時水交支社を辭し、五時發の汽車に乘る。本日より自由行動、予は京都に下車宿先づ島津理科機械製作所に至り機械標本等を觀、次で御所、北野天滿宮、金閣寺等を拜し歸宿。夜散歩鴨川のほとり賑かなれど俗に、山陽が山紫水明とは何處なりしかを疑ふ

七月廿九日　木曜　曇

朝七時四十八分發の汽車にて京都を立ち、桃山東御陵に參拜し桃山下車、桃山御陵、桃山東御陵に參拜し謹で其英靈を吊せり。次の列車にて奈良に向ひ十時五十分着、車を僦ふて名所古跡を巡覽し、鹿草山の麓某旗亭にて晝食、一時三十五分發の汽車に乘る。木津、笠置等の各驛を經、龜山にて乘換、四日市、桑名に過ぎ、七時三十四分名古屋着宿

七月卅日　金曜　晴

千種より乘車午後二時少し過ぎ歸福

以上見學の大要を日記樣に記載したれば、思はず前後不用の分まで錄するに至れり。更に項を改め詳說批評せんか、徒らに冗漫重複の嫌あれば、唯だ二三の雜感を補ひて擱筆する事とせん

●滯在五日間連日の快晴、晝夜炎熱焦くが如く、殊に軍艦内の蒸熱さ、恰も焙爐の中に在るが如し。我等は見學を終りて宿所に歸れば、直に上衣を脱して瀧なす汗を絞るに、案内の將卒はボタン一つ外さざして平然たりしには、感服の外なかりき

●海軍々人は一般に快活にして辭令に巧に些の隔意なくして能く人と應對す、夫が殊更勉むるに非ず、態とらしからずして嫌味なければ、心地よし

●一艦に云ふに及ばず、一港さながら一家の如く、上下敬愛して和氣港内に滿つ。境遇の然らしむる所ならんも、陸軍などに比し麗はしき所なるべし

●長野縣人が各方面に活動する事は常に耳にする所なるが、舞鶴軍港に於ても亦其然るを知りたり、兵員は其數に於て第一位を占め、幹部も亦各部に其要位を占めたり他縣に率先したる這回の視察に依り、我等の滿足したると共に彼、等在港者の狂喜したる誠に所以ありと云ふべし。

●港内に草花など盛に栽培せられ、盆栽などの多かりしは意外なり、水交支社の食堂の如きも常に盛花盆栽を以て飾られ、將校の中にもダリア、朝顏等の栽培家少なからぬ樣なり

●軍艦内は勿論各處の建物一般清潔にして出入毎に其靴を拂拭することの煩に堪ねざりしが、人の摸範たる可き、我等の住處も亦斯くあり度きもの也

●一行十八名盡く鳥合の衆なるに、之を統率する者なく、京都に於て代表者と云ふを貳名互選したるも、其器に非ず、進退應對頗る遺憾を感じたり。

●水交支社賄部の調理の上手なりしには舌を鳴らしたり

●我等嘗て高崎聯隊に於て六週間現役に服したりしが、常に回想して過去の生活中最も樂しかりし事となす。今又假令僅かなりとも海軍生活をなし、軍港内の潑剌たる空氣に觸れ、無量の教訓を體せり

内田益治君を追憶す

在長野市　洋舟生

前號の誌上で校友諸賢の知られた通り校友内田益治君は本年六月二十七日を以て前途有爲の才を抱いて空しく永眠せられた、君と同級で其親しかつた友の一人なる洋舟子は七月の初旬に其悲報に接し實に驚愕悲嘆せざるを得なかつた、

茲に君を追憶するの便にもと一文を誌上に載せる擧にしたのである、

君は一昨年三月我々と共に業を卒ねて母校を出てから數月の間は鄕里に居られた、其年の六月僕が公用で君の鄕里上水内郡宇井村へ出張した時に君は未だ鄕里に居られたので早速役場へ來て貰つて色々便宜を與へて貰ひ其夜は役場の宿直室に（此村には旅宿が無い）同宿して樣々の話に花を咲かせたのであつた、間もなく其八月に君は山梨縣廳に奉職することとなつて其赴任の途上某日僕の下宿に來て其夜は其頃漸く飲み慣れた麥酒を飲みながら夜更くる迄語り續けて僕の宿に一所に寢て翌日山梨縣へ行かれた。同年の十月であつたと思ふ一日僕が市中を散策して居た時突然君に出遇うた、什麽したのかと聞くと病氣の治療の爲當地の某病院に入院して居るとの事で病名は勝胱加多兒であつた、長野に來て居ながらどうして今迄默つて居たのだと僕が威猛高になると君は只頭を搔いて笑つて居た、其後二三度病院を訪うて病氣の經過は良好であると聞いて安心して居た、最後に僕が君を病院に訪うた時もう二十日程も經過すれば全治する見込だから其頃になれば山梨へ行くと言つて居られた、間もなく僕は壹個月程出張した、其後君から音信もなし多分山梨縣に勤めて居る事と思うて居た、處が爾來病狀面白からずして東京大學病院の診斷を受け其處方に依つて自宅で靜に療養して居ると云ふ事を聞いたのは昨年の六月頃であつた、其後二回程書面で慰問したまゝ久敷無音に流れて居た處本年七月の初旬に君の同鄕の同僚から君の訃を聞いて驚嘆した樣な次第で早速本縣廳在勤の同窓が連名で君の尊父へ宛てて吊詞を送つた、之に對して送り越された尊父の書面に依つて君の永眠前の狀況を詳しく知るを得たのである、其文を茲に揭げて校友殊に同級であつた諸君に對しての報告とする

謹啓愚息益治儀の死去に對し御手厚き御詞を賜はり實に難有御禮申上候益治儀は一昨年十月頃より勝胱かたる症にて腦み昨年五月東京大學病院に入院致し歸宅後は同病院の處方に依りて治療致居候處去月初旬頃より食飲進まず二十日頃よりは僅に冷水にて咽喉を潤すのみなる程に相成り心身の衰弱甚しく二十七日午前二時眠るが如く黄泉の客と相成申候何彼と取紛れ何方へも御無音にて實に申譯も無之然るに却て御音問被下誠に恐縮の至に不堪候本人も永き恙の事故既に覺悟の樣子にて冥目仕り候次第家族に於ても其れ迄の運命と諦め申候諸賢に於かれては專ら御攝養職務に御盡しあらんこと只管祈念仕候

七月十三日　内田要之助

君の在校當時を追憶して見ると極めて眞面目であつた君の生活の中にも面白い逸話もある

年齡の差が五つ六つあつた同級の中で君は中位の年配で頭腦は明拆であり且普通の勉强はしたので成績は常に級の上位に居り同級生から畏敬されて居た、代數や幾何が得意だつたので其出來榮には吾々常に羨望したものである、入學前に村役場に勤めた事

のある君は樋口君等と共に同級中球算達者の聞ねがあつたもので教室で答の合うた時擧げる手の中には必兩君の手があつた、時に依ると兩君の二つの手が擧つて居る丈の事もあつた、

寄宿舍で一日某先生が舍監の時に内田君を室長に戴いて居る第○室に行かれた處が其壁間に麗々しい掲示があつた、先生が讀み下して見ると其文に曰く、一、室員にして『スカンク』(放屁の事)を發したる者ある時は一回に付金五厘の罰金を徵收す、但一日に貳拾五以上を發したる者に對しては罰金を免除す、第○室長とあつた、先生は室員に問うて其説明により『スカンク』の意義及罰金の使用途が『ポテト―』(燒芋で)催する同室會費である事を知つて苦笑して去られたそうである

洋舟子私かに惟ふに該規約は放屁を矯正すると云ふ樣な紳士的の目的の爲ではなく、『ポテト―』の資を得る目的の爲であつた事は其規約の但書から見るも亦内田君が細江君と共に(細江君たるもの怒るべからず呵々)大の愛ポテト―家であつた點から見るも明かである、當時其室員中には一日二十五以上發した功勞に依つて罰金免除になつた豪傑もあつたとの事で室長たる内田君も隨分腦まされた事だつたろうと思ふ

君は余りの運動家ではなかつたので擊劍は行らず庭球は少しは行つたが下手であつたられで金棒にぶら下る事と弓を射る事とが君の運動の主なるものであつて弓は仲々上手で下枝君等に續く達者であつた、僕も弓の仲間で君と一所によく射たもので或時などは放課後から彈き初めて夕食後燭火を點して射た事もあつた

之も三年級當時の夏の一日吾々弓術連中が放課後盛に弓を射て居ると同級で擊劍家の聞ねある坂田が君彌次的に來てやはり弓を彈いて居たが丁度僕が今や滿月の如く(?)に引きしぼつて將に放たんとして居た時坂田君が僕の後から覗き込んで切れ狙を付けて居た、左樣な事とは知らぬ射手の僕は其頃内藤先生から『矢を放つ時には自分の軀を引きしぼつた弓の中へ割り込む心でやれ』と言はれて居たので思ひ切つて引手を後に撥ねたからたまらぬ坂田君の顏をヒドク撲いた、坂田君は怒りもせず妙な顏をする内田君は倒れうにして笑ひながら○○君の弓を射る傍へ寄るは雷の傍より危險だと云つて彌次る、傍の者はどつと笑ひ崩れると云ふ滑稽を演じた、其後は不絶此事で内田君から盛に彌次られたもので今少し綽號でも附けられる處だつたが危く免がれたのは望外の幸であつた、斯樣な驛で君と始終一所に射たので此頃長野の矢場へ行つた時にも當時の事を思ひだしたりした、

亦君は圍碁も可成り上手で寄宿舍で張り出した笊碁の番附では慥か前頭の中位に居たと思ふ

以上の樣な無邪氣な滑稽が君自身に亦君を中心として起つた事はあつたが君の爲人は極めて眞面目なものであつた

吾々が寄に畏敬し前途に望を囑して居た君今は既に故人となつたのである、實に惜い事をした。

養老の瀧探勝記

横井正風

今日は八月十八日である休假の殘日も最早少くなつてきた僕はこの日を利用し養老の瀧探勝の途に上つたかねての約束通り三宅某君と某所に會し稻澤驛を出發した時はまだ早い曉の霧を破つて遠寺の鐘がゴーンゴーンと響いて來る轆轤たる車の響は茫漠たる平野の清い空氣をぬいて進んで行く紫匂ふ曙の御空には今しも白雲の衣ぬぎすてゝ登り來る朝日の麗はしさよ木曾、長良、揖斐の諸大鐵橋もいつしか過ぎ次第〳〵に江州境なる伊吹の山に近より午前八時大垣驛に着しぬこゝは養老鐵道の連絡點である中空に聳ゆる大垣城を後に見て同九時養老驛に着し歩を瀧に進めぬ瀧までは半ば遠からぬとの事である二三丁行けば養老公園内に入る老杉枝を交ねて鳴きしきる蟬の聲もいと忙はしげである山道を辿り行くこと十數町にして山腹にいたりぬ其昔孝子が老を養

つた世にも名高い瀧はこゝにあるのだじッと眺めて居ると孝子の姿が目前にちら〳〵現はれるやうであつた時はあだかも十一時兩山險しく峙ちたる岩石の間よりは瀑水直下する事十數丈峻壁に注いで其の狀恰も水晶簾の九霄より垂るゝが如し瀑水化して煙となり霧となり輕綃となり玉塵となり珠屑となり瑠璃となる日頃暑さに苦しみ吳牛の月に喘ぐが如き余もこの瀧の畔に來りて清き流れに耳を洗ひ涼しき風に躰を拭へば腋下習々として羽化登仙するの想があつた養老を後に歸路についたのは午後一時このあたり田面に早稻の花咲き揃ひたるあり賤の處女が鄙歌、うたひながら田草とる狀などをかし都の市町を汗もしとゞに車引く男にくらべては心やすさ思ひ遣らる今日はこれより岐阜の金華山に登り夜は鵜飼見物をなして歸宅するのである

通信

四國會友會便り

會員の一人

母校の名今や宇内に普ねく同窓の發展旭日の如くなるは誠に喜ばしい次第である

茲に顧て我四國の島に奮鬪しつゝある同窓を顧れば今や實に十余名を算するのである茲に於てか一同親しく一堂に相會し胸襟を開きて母校を語り蘇峽を談じ抱負を披瀝して親睦を圖り以て各自の發展に資し一は以て南海に於ける同窓の存在を闡明し母校の眞價を紹介せんとの希望は誰語るとはなけれども常に各自の心頭を掠めて休まなかつた而し四國の地たるや四縣に亘りて山河を隔て交通の便惡く且各其奉職方面を異にすることゝて之が決行は容易の事ではなかつた空しく胸を抑へて機會を待つのであつた茲に機や熟しけん今夏の暑中休暇を利用して第一回の會合を決行せんとの議何處よりとなく誰よりとなく湧き出づるが如く噴き出づるが如くに起つた忽にして檄は飛んで贊同は索められた如何でか異議あるべき全員の大贊成を得た非常なる歡喜の聲を以て迎へられた而し職務の都合により缺席の止むを得ざるものを生じたるは殘念であつた

七月卅一日八月一日の兩日を以て愛媛縣西條町に第一回の會合は開かれた

滿腔の抱負と希望と熱情とを以て相會せる者七名であつた。ヤ！〳〵との聲は至る處に起つた『君とは十二年目に逢ふたネー隨分君も親爺になつたネー』などの會話は交換された、各自の胸中には懷しさと嬉しさとの外には何物もなかつた、此時欠席の大森君より『盛會を祝す』との祝電が飛來した夫より左記會則の議決に移つた

第一條　本會ハ四國會友會ト稱シ在四國同窓生ヲ以テ組織ス

第二條　本會ハ會員ノ親睦ヲ圖リ各自ノ發展ヲ期シ兼テ母校トノ聯絡ヲ保ツヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ第二條ノ目的ヲ達スル爲メ毎年一回以上會合ヲ催スモノトス

其期日並ニ場所ハ前回ノ會合ニ於テ豫メ之ヲ議決スルコト　(下略)

終つて宴に移り衆議一決無禮講となる紅裙酒間を斡旋し談は益々佳境に入る既にして何所よりとなく『ナカノリサン』起るや忽ちにして相和し相合し天地も裂けんかと疑はれた時と共に興は益佳境に入り隠藝競爭となる小瀧君の小原節兒野の伊那節及大和手品乙谷君のチンチコ踊り南村君の西洋手品佐藤君の劔舞成瀬君の百面觀等は最も喝采を博した尙酒間即吟を催し各自の即座に吐露せるもの左の如し

南海の山に輝く曾友會　蘇岳
夏涼し四國の山に木曾の節　南岳
兄弟が七人寄つて曾友會　蜻頭
木曾節や南の山河風薰る　鳴水
身は七つ心は一つ曾友會　松山
鬚四人目鏡五人の曾友會　反魂
久し振逢てうれしや夏の海　南岳
賑やかいうや四國の同窓逢ふて徹夜の斗酒の宴　高社
木曾節の吹や木曾路にひゞくらん心を
こむる同胞の宴　鳴水
逢ふてうれしや別れのつらさ之が昔の

たなトみか　南岳
末長く幸多からん會友會
初め七人七福の神　鳴水

開會を祝して小崎君より寄す

功を立てゝ母校の幸となれ
磨き勵まん南海の空に
石槌の峯の奥谷今日越えて
大平洋も明日は渡らん
香りゆかしき木會檜
暖き國の柱とこそなれ

午後十二時十二分の歡を盡して宴を閉ぢ夫より一同枕を並べて寢に就きたるも相語り相談じ夜の更くるを知らなかつた

翌八月一日紀念の撮影をなし當南村君より西條名勝繪葉書の寄附あり午後三時大成功の中に四國會友會第一回の會合は閉ぢられた

因に當日の出席會員を記せば左の如し

小瀧升太郎君（一回卒）
兒野榮君（一回卒）
乙谷耕吉君（二回卒）
南村末吉君（二回卒）
松澤莊太郎君（六回卒）
佐藤一郎君（九回卒）
成瀨義郎君（十回卒）

雜錄

學校記事

○終業式　八月廿三日午前九時始業式を講堂に行ひ七宮校長より攝生試驗等に付訓辭ありたり

○講演會　八月廿七日午後零時半より世界旅行者中村直吉氏の講演會を講堂に開く題目は南米ブラジル、アマゾン探險なりし

○川越內務部長來校　八月廿四日午前川越內務部長來校參觀せられたり

○前期試驗　前期試驗は九月十七日より開始廿五日終了の筈

會員移動

○大脇又衛君は臺灣總督府營林局に轉任

○小松精內君は今回家事上の都合により諏訪郡林業技手を辭し鄉里片岡村に歸り家業に從事する事となれり

○但馬廣造君は小松君の後を襲ひて諏訪郡林業技手となれり

○伊藤喜代君は北海道鐵道管理局保線事務所林業部に轉任

○脇田義正君は小縣郡技手に就任

會員消息

○成瀨義郎、篠原昇士、兩君賜暇歸鄉の序を以て母校を訪はれたり

○家高甚一君は今回小川伐木所雇を辭し盛岡高等農林學校入學準備の爲暫く上京勉學の由

林友代領收報告

金壹圓　山村克人君

安藤先生謝恩金の中へ追加

金壹圓　成瀨義一郎君

大正四年九月廿三日印刷
大正四年九月廿五日發行
（定價三錢）
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫
長野市四後町丙二十一番地
印刷者　田中駿吉
長野市四后町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　藤澤書店